

全国 まちづくり 若者サミット 2026



『語^{まち}り合うこと』から始めよう。
～つながりが紡ぐ 私 の価値創出～

事業報告書

会 場: 日本青年館8階カンファレンスルーム

対 象: 地域活動に取り組む若者(大学生・高校生を含む)、これから地域活動に取り組んでみたい方、若者の活動を応援したい方、地域活動に関わる行政・大学・企業・NPO など

主 催: 一般財団法人日本青年館 日本青年団協議会

企画・運営: 全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員会

サミット 2026 を終えて

「全国まちづくり若者サミット 2026」を 3 月 7 日・8 日の 2 日間にわたって、日本青年館カンファレンスルームで実施しました。昨年度同様に日本青年団協議会（以下、日青協という）が主催する第 71 回全国青年問題研究集会と合同で行いました。また青年団や若者会議、学生団体などの若者で組織した実行委員会を立ち上げ、若者の若者による若者のためのサミットを目指し、事業プログラムから登壇団体の選定、当日の運営までを実行委員会のメンバーが主体的に行いました。

テーマは“『語り合う』ことから始めよう。～つながりが紡ぐ私（まち）の価値創出～”。参加者が語り合いを通して、自分や他者が知らないまちの魅力に気づき、交流の中で「まちづくり」に対する自分の行動や活動の方向についてヒントを見つけることができることを目標にサミットを作り上げました。

ゲストトークでは宮城県石巻市を中心に活動する、ほやドルの萌江さんをお呼びし「私と”まち”の価値創出」をテーマに語っていただきました。自分でまず行動することの大切さや、自分の当たり前が他者の目からは特別なものに見えたりするので、他者と関わることの大事さなど、参加者のモチベーションが高まるお話を頂きました。

事例発表では多様な 9 団体をお呼びしました。報告された実践はいずれも示唆に富み、発表の熱量の高さとも相まって参加者にとって大きな学びと励みになりました。

今年は特にグループディカッションに多くの時間を割き、私とまちのヒントを探すだけでなく、共に学んだグループメンバーのことも考えアドバイスを送り、相互に学び合う関係性を構築することができました。

全国まちづくり若者サミットは、若者が地域づくりについて学び、交流し、活動を広げていくための大切な場です。そのためには成果を単年度ではなく中・長期的にみていく必要があります。参加した若者たちや各団体がこの場をきっかけに、どう発展していくか、また、若者が互いに支え合う関係性を維持していくか。そこにこそ、サミットの真の成果があらわれるのです。

今年度のサミットでもさまざまな出会いや学びが生まれました。その模様を本報告書にまとめました。本報告書が、参加者一人ひとりの学びを振り返る手がかりとなるとともに、全国各地で若者が地域と向き合い、語り合い、行動を起こしていくための一助となれば幸いです。

一般財団法人日本青年館

開催概要

■事業名：子どもゆめ基金助成活動

全国まちづくり若者サミット 2026

■期 日：2026 年 3 月 7 日（土）～8 日（日）

■会 場：日本青年館 8 階 カンファレンスルーム

■参加者数：106 名

■主 催：一般財団法人日本青年館 日本青年団協議会

■企画・運営：全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員会

宇佐原嘉晃（実行委員長）（未来守・立命館アジア太平洋大学）

大松健祐（副実行委員長）（愛知県青年団協議会）

鴨志田早織（ひたち若者かがやき会議）

皿谷倅也（副実行委員長）（五霞町地域おこし協力隊・南陽青年団）

島貫旬人（南陽青年団）

下鶴賢太郎（元別府大学青年団）

富澤優希（國學院大学）

長谷川綾（福島県連合青年団）

文屋実（富谷市青年団）

■協 力：日本青年館青年問題研究所

■協賛参加：稲森 稔尚 様

伊賀市若者会議 宮崎 誠也 様

日程

3月1日（土）

時間	内 容
13:00	開会式 開会あいさつ 主催者挨拶 佛木 完 （一般財団法人日本青年館常務理事） 実行委員長挨拶 宇佐原嘉晃（全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員長） 実行委員会メンバー紹介 青年問題研究所研究員紹介 オリエンテーション 総合司会：安部晋司（関西大学）
13:20	自己紹介 アイスブレイク 自分のまち人狼 総合司会：安部晋司（関西大学） 司会：長谷川綾 文屋実 （全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員）
14:30	ゲストトーク「私と”まち”の価値創出」 ゲスト：ほやドル 萌江さん 司会：宇佐原嘉明 皿谷倖也（全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員） 休憩 質疑応答
16:15	グループディスカッション① 「私と“まち”の現在位置」を理解する STEP 1 ゲストトークの感想共有 STEP 2 「私と“まち”の現在位置」を理解する STEP 3 萌江さんが聞く！ 全体共有・発表 総合司会：安部晋司（関西大学） 司会：鴨志田早織 島貫旬人（全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員）
17:55	オリエンテーション
16:30	夕食交流会 進行：宇佐原嘉晃 皿谷倖也 （全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員）
21:00	終了

3月2日（日）

時間	内 容
9:00	1 日目の振り返り 事例発表にむけて（各事例発表の部屋で実施） 司会：下鶴賢太郎 鴨志田早織 皿谷倭也 （全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員）
9:30	事例発表 【カンファレンスルームイエロー】 ① ひびのば（群馬県 前橋市） 発表者：宮本綾乃さん ② 竹田Tキャンプ（福井県 坂井市） 発表者：柴田葉奈さん ③ 舞鶴町青年会（大分県 大分市） 発表者：古田裕樹さん 【カンファレンスルームブルー】 ① 土浦わかもののまちプロジェクト（茨城県 土浦市） 発表者：酒井慶太さん ② 地域活性化団体のろし（千葉県市原市 埼玉県行田市） 発表者：間野圭子さん ③ 南陽青年団（山形県 南陽市） 発表者：小澤光希さん 【カンファレンスルームグリーン】 ① Hope Creator（東京都 国分寺市） 発表者：峯奏音さん ② はまだ協働学舎ファンタス（島根県 浜田市） 発表者：大地本由佳さん ③ うるま市青年連合会（沖縄県 うるま市） 発表者：崎上桂弥さん
12:00	休憩
13:00	グループディスカッション② 「これからの自分・まちのヒント探し」
15:00	2 日間のまとめ お互いの 2 日間の学びや交流を振り返り、メッセージを交換しあう
15:45	クロージング ・主催者あいさつ 杉山和義（日本青年団協議会会長） ・実行委員長あいさつ 宇佐原嘉晃（全国まちづくり若者サミット 2026 実行委員） ・閉会のことば 司会：安部晋司（関西大学）
16:00	サミット終了

<当日資料ダウンロード用 Google ドライブ>

アドレス: <https://x.gd/IPet8>

QRコード: 右記



オープニング

全国から100名を超える参加者が集まり、全国まちづくり若者サミット2026が開幕した。主催者挨拶や実行委員長挨拶、実行委員会メンバー紹介などが行われ、参加者はこれからはじまるサミットに対して期待に胸を膨らませた。



主催者挨拶

佛木完(一般財団法人日本青年館常務理事)



実行委員長挨拶

宇佐原嘉晃



全国まちづくり若者サミット2026

実行委員会紹介

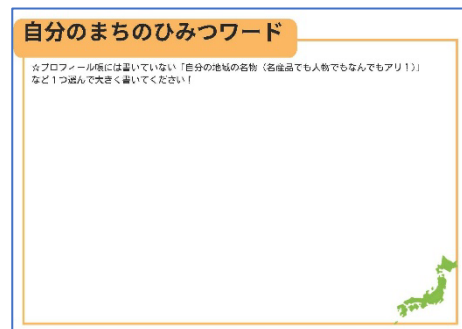
自己紹介・アイスブレイク 「自分のまち人狼」

ねらい：これからのグループディスカッションで話し合える雰囲気づくり

紙に「地元のひとしか知らないまちの魅力・観光地・モノ（ワード）」を書き、その中から1枚を選び、3分間話し合って誰が書いたものかを当てるゲーム「自分のまち人狼」を行った。参加者からは「意外な発見があった」「各地の特色が出ていて楽しい」といった声が多く見られた。



まずはお互いに自己紹介から



自分のまちのひみつワードシート



自分のまちのひみつワードを書く



誰が書いたワードかをお互いに当て合う

ゲストトーク「私と“まち”の価値創出」 ほやドル萌江さん**ほやドル萌江さんプロフィール**

宮城県の特産品「ほや」を、全国・全世界へと PR するため、ほやのアイドル「ほやドル」として活動中！
テレビやラジオへの出演、また「いしのまき観光大使」や宮城県警が委嘱する「みやぎ防犯広報大使」にも就任し、
宮城県内を中心に活動の幅を広げている。

ねらい：若者自身の手によるまちづくりについて考えていくため、ほやドルの萌江さんを招き、ゲストトークを行う。ローカルアイドルとして個人ではじめた活動が人や地域を巻き込み、やがて人と人を繋げたり、地域づくりに繋がっていく実践は、若者にとっても目指しやすい・取り組みに繋げやすい姿であると考えた。その経験を若者に語ってもらうことで、参加者のまちづくりへの関わりのハードルを下げるきっかけとする。

今回のゲストトークでは、「ほやドル」として活動する萌江さんをお招きし、地元・石巻への思い、ほやを広める活動を始めたきっかけ、そして人を巻き込みながら地域のにぎわいをつくっていく姿勢についてお話を伺った。

萌江さんが「ほやドル」として活動を始める大きなきっかけとなったのは、東日本大震災であった。高校1年生のとき、宮城産の「ほや」が大量に処分されていることを知り、「ほやをどうにかしたい」という思いが強くなったという。萌江さんにとって、「ほや」は子どものころから生活の中に自然にあった身近な食材であった。しかし、大学進学で仙台に出た際に「ほやが好きです」と話すと、「ほやって何？」と聞かれ、石巻の外では「ほや」が必ずしも身近な食べ物ではないことに初めて気づいたという。

活動の出発点は、華やかな舞台への憧れではなく、地元の食材を守りたい、伝えたいという切実な思いであった。もともと萌江さんは、地元が特別好きだったわけではなく、むしろ都会に出たいという気持ちを持っていた。しかし、震災後に石巻を訪れたボランティアたちが、復興支援を終えた後も石巻に関わり続け、移住したり、毎年3月11日にイベントを開いたりする姿を見て、心を動かされた。外から来た人たちが石巻を大切に思い、行動している。その姿に触れる中で、「地元にいる自分たちは、なぜ何もしないのだろう」という思いが芽生え、改めて石巻を知ろうとするようになった。そこから少しずつ、地元への見方が変わっていったという。

ゲストトークの中で特に印象的だったのは、「地元にいると、地元のいいところは見えにくい」という言葉だ。当たり前にある風景や食文化、人とのつな

がりは、近くにいるほど見過ごしてしまう。しかし、外の人との出会いや、地域を見つめ直す経験を通して、当たり前だったものが大切な魅力として見えてくる。萌江さんにとっての「ほや」もまた、日常の中に自然にあったものだからこそ、その価値に気づきにくかった。しかし、外に出て人と話すことで、自分にとっての当たり前が、ほかの人にとっては珍しく、魅力的なものになり得ることを知ったのである。

萌江さんは「自分の好きが見つからない」と相談されることもあるという。しかし、その答えは遠くに探しに行くものではなく、日々の暮らしの中にあるのかもしれないと語った。人と話してみることで、自分にとって当たり前だったことが、実は得意なことや特別な魅力だったと気づくことがある。萌江さんの活動は、まさにその気づきから始まっている。

石巻を盛り上げたいという思いから、萌江さんは、2023（令和5）年に「ほやっほ一祭」を立ち上げた。現在では1万人を集客するイベントにまで成長しているが、その歩みは最初から順調だったわけではない。出店者一人ひとりのやり取り、会場の確保、消防署への許可申請など、イベントに必要な準備を半年間かけて自ら進めてきたという。その姿を見た人たちが、「応援したい」「自分も関わりたい」と感じるようになり、少しずつ仲間が増えていった。

「どうしたら人を巻き込めるのか」という問いに対して、萌江さんは「まずは自分が動くこと」と語った。人に指示を出すだけではなく、自分でできることは自分でやってみる。その姿を見て、周りの人が「これをやろうか」「手伝おうか」と声をかけてくれるようになるという。現在の「ほやっほ一祭」の運営スタッフも、専門のイベンターではなく、地元の知り合いやバンドメンバーなど、身近な人たちが支えている。最初は一人で抱えていたことも、自ら行動する姿が周囲に伝わることで、少しずつ支え合う形へと広がっていった。

自分にとって当たり前だったものを見つめ直し、それを「好き」として言葉にし、少しずつ行動に移していく。その積み重ねが、やがて人を動かし、地域の新しい力になっていく。身近な「好き」は、地域を変えるきっかけになる。萌江さんの言葉と歩みは、そのことをやさしく、そして力強く伝えてくれるものであった。

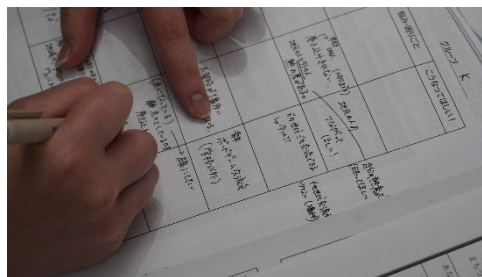


グループディスカッション①「私と“まち”の現在位置」を理解する

ねらい: グループメンバーがそれぞれ、自分とまちの現在位置を明らかにする。

「現在位置」とは今、自分やまちがどんな活動をしているか。悩みや課題は何か。魅力は何かを明らかにすること。またほかのメンバーがどんなひとか、どんなまちに住んでいるのかを知り、経験交流を図る。

参加者は各グループに入った実行委員や日本青年館職員、日本青年団協議会役員を司会役として、自分とまちの現在位置を理解するためのグループディスカッションを行った。それを探るヒントとして、事前に行ったプロフィール帳を参考にしながら、自分やまちのことを考え、現在位置についてお互いに話し合った。また相手から聞いた内容について「つながりシート」に書き込み、自分だけでなく、相手のことについて可視化して理解を深めあった。



司会が円滑にグループディスカッションを進行 つながりシートに相手の話を書き込んでいく



プロフィール帳をみて相手のことを深堀り

グループディスカッション① つながりシート グループ _____

名前	今していること	将来の夢	こうなったらいい

つながりシート

事例発表

ねらい：各地で活躍する団体の発表を聞き、わたし／まちに生かすアイデアを発見する。

参加者は、自分の活動やまちに生かせるヒントを得るため、関心のある団体を選び、3つの部屋に分かれて事例発表を聞いた。

今回発表した9団体に共通していたのは、若者が地域活動の単なる「参加者」ではなく、「担い手」として主体的に動いている点であった。それぞれの団体は、地域のつながりの希薄化や担い手不足を課題として捉え、祭り、駄菓子屋、交流拠点、こども食堂、ワークショップなど、さまざまな方法で多世代が関わる場を生み出していた。

さらに、いずれの団体も、行政、学校、企業、地域住民などとの連携を大切にしていた。活動を進める中では課題や失敗もあるが、それらを受け止めながら継続的な実践を積み重ねている点に、若者によるまちづくりの可能性を感じる発表であった。

カンファレンスルームイエロー

- ① ひびのぼ（群馬県 前橋市） 宮本綾乃さん
- ② 竹田Tキャンプ（福井県 坂井市） 柴田葉奈さん
- ③ 舞鶴町青年会（大分県 大分市） 古田裕樹さん

①ひびのぼ（群馬県 前橋市）

宮本綾乃さんは、群馬の大学に在学しながら、群馬の食や観光を発信するSNSアカウントを立ち上げ、10万人のフォロワーを獲得してきた。SNSで地域の魅力を発信する中で、地方創生にはいくつかの課題があると感じたという。

1つ目は、地方では若者が進学や就職で都市部へ流出し、地域に人が少なくなっていること。2つ目は、地方創生に関心のある学生や若者がいても、実際に動き出すきっかけや、活動を導く人が少なく、その力を十分に活かせていないこと。3つ目は、SNSによる発信だけでは地域全体を巻き込む活動にはなりにくいことである。

こうした課題意識から生まれたのが、駄菓子屋を活用した地域の居場所づくりを行う「ひびのぼ」である。「ひびのぼ」は、学生を主体にオンラインの発信力とリアルな場をつなぐ新しい地方創生の形である。

駄菓子屋を選んだ理由は、かつて駄菓子屋が、子どもにとって親や先生以外の大人と出会える場所であり、地域の人との自然なつながりを生む場だったから

である。宮本さんは、駄菓子屋を単にお菓子を売る店ではなく、教育・商い・文化・福祉が交わる「地域コミュニティプラットフォーム」として再構築しようとしている。

具体的な活動としては、空き家などを活用した実店舗型の駄菓子屋、企業のオフィスに駄菓子を設置して学生が定期的に届ける企業サブスク型、地域イベントへの出店などがある。学生は単なる店番ではなくひとりひとりが起業家として、どう集客するか、どう売上を上げるかを考えながら、実践的に学ぶ役割を担っている。

発表全体を通して、将来を最初から明確に決めるのではなく、まず行動し、人と出会い、語り合う中で、自分のやりたいことや地域での役割を見つけていくことの大切さが伝えられた。「ひびのぼ」は、駄菓子屋という身近な場を通じて、若者の挑戦を生み出し、子どもから大人までがつながる地域の居場所をつくっている。



②竹田Tキャンプ（福井県 坂井市）

竹田Tキャンプは、学生が福井県の地域（坂井市竹田地区）に滞在し、自分の興味や専門性を地域資源と組み合わせながら、プロジェクトを行う活動である。

特徴は、京都と福井の二拠点で活動している点である。京都では話し合いや準備を行い、福井では実際に地域に滞在し、暮らしに触れながら実践する。月1回のワーキングや長期滞在を通して、短期的な訪問ではなく、地域の人たちと継続的に関わっている。

学生は、建築、デザイン、食、アート、福祉など、それぞれの関心や専門性を持ち寄り、地域にある農業、漁業、工芸、蔵、シニア世代との交流などの資源と結びつけながら活動している。

「農業×アート」「工芸×デザイン」「シニア×福祉」のように、学生の自由な発想と地域資源を掛け合わせることで、新しい取り組みが生まれている。

発表で印象的だったのは、学生の感性によって、地域の当たり前が新しい価値として見直されている点である。地域の人にとっては見慣れたものでも、学生の視点から見ると「おもしろいもの」「価値あるもの」として再発見される。漆器の柄を活かしたアパレル商品づくりや、草のアート制作のために地域で草刈り

を行うなど、学生の自由な発想が地域の新しい魅力を引き出していた。

竹田Tキャンプは、学生が地域に何かを「一方的にしてあげる」活動ではない。学生と地域の人が「一緒に考え、一緒に試し、一緒に楽しむ」実践の場であるという。若者の感性や行動力を生かしながら、地域の当たり前を新しい価値に変え、まちの可能性を広げている。



③舞鶴町青年会（大分県 大分市）

舞鶴町青年会は、大分市舞鶴町を拠点に、長濱神社夏季大祭や御獅子さま巡行などの伝統文化を次世代へつなぐことを大切に活動している青年組織である。

舞鶴町では、町内会の高齢化や住民同士のつながりの希薄化により、祭りや伝統文化の担い手不足が課題となっていた。こうした状況を受け、2015（平成27）年4月に舞鶴町青年会が設立された。現在は30代～40代の男女30人程度で活動を行っている。

青年会は、山車巡行、子ども神輿、宮神輿の渡御などに関わり、2018（平成30）年には山車を新調した。また、新春の御獅子さま巡行や祭囃子練習会にも取り組み、子どもたちが地域の祭りやお囃子に触れる機会をつくっている。コロナ禍でも工夫しながら活動を継続し、地域文化を絶やさないよう取り組んできた。

活動は伝統文化の継承だけにとどまらない。毎月1回、公民館で開かれる「ハマの井戸端会議」では、子どもから大人までが気軽に集まり、祭りの時だけでなく日常的なつながりを育んでいる。

さらに、「おせったい」「舞鶴町でHAPPY ハロウィン」「舞鶴杯卓球大会」「舞鶴町マラソン大会」など、子どもや若い世代も参加しやすい新しい企画にも挑戦している。公式キャラクター「まいつつる君」や青年会新聞、Webサイト、SNSなどを活用した広報にも力を入れ、活動や祭文化の魅力を発信している。

青年会は、祭りや伝統芸能を軸にしながら、世代を越えた交流を生み出し、地域への愛着を育てている。伝統の継承と新しいまちづくりを結びつけ、地域のつながりをつくり直している。



カンファレンスルームブルー

- ① 土浦わかもののまちプロジェクト（茨城県 土浦市） 酒井慶太さん
- ② 地域活性化団体のろし（千葉県市原市 埼玉県行田市） 間野圭子さん
- ③ 南陽青年団（山形県 南陽市） 小澤光希さん

①土浦わかもののまちプロジェクト（茨城県 土浦市）

土浦わかもののまちプロジェクトは若者が地域に関わる機会をつくり、まちへの愛着や地域の一員としての意識を育てる取り組みである。

発表では土浦市が抱える課題として、人口減少や高齢化、駅周辺のにぎわいの低下が挙げられた。特に、高校生がまちなかで過ごす場所や楽しい思い出をつくる機会が少なく、地域への愛着が育ちにくくなっていることが問題となっていた。その結果、進学や就職で地域を離れた若者が戻りにくくなり、人口減少がさらに進むという状況に陥っていた。

この課題に対して、酒井さんは「若者への投資」が大切だと考えた。高校生が土浦で良い経験を積み、地域に愛着を持つことで、将来も土浦に住み続けたり、戻ってきたり、子育ての場所として選んだりする可能性が高まるのではないかと考えたそうだ。

プロジェクトではその課題を解決するために「放課後こども食堂」や「土浦ティーンズフェス 2024」に取り組んでいる。「放課後こども食堂」では、高校生が主体となって地域の子どもや家庭を支援し、子どもたちにとっては高校生のお兄さん・お姉さんに関わる貴重な機会となっている。一方、高校生自身にとっても、地域の人と接することで、コミュニケーション力や社会課題への関心、自己肯定感を高める学びの場になっている。

また、「土浦ティーンズフェス 2024」では、高校生がイベントを自ら企画・運営した。資金集めにも挑戦し、クラウドファンディングで約 50 万円を集めるなど、地域の人に思いを伝えながら実現に向けて行動した点は特徴的である。

土浦わかもののまちプロジェクトは、若者が地域活動に参加しながら、自分たちで考え、動き、まちづくりに関わっていく力を育てている。若者が土浦で楽しい経験を重ね、卒業後も「また関わりたい」と思えるまちをつくることを目指している。



②地域活性化団体のろし（千葉県市原市 埼玉県行田市）

一般社団法人のろしは、複数の地域にまたがり活動を行っている地域活性化団体である。2017（平成 29）年に設立され、10 代～40 代までの学生や会社員など約 30 名が、ひと月に 1 回～2 回程度、週末を中心に地域に通いながら活動している。活動のコンセプトは「福業」であり、自分自身も地域も幸せになる関わり方を大切にしている。

発表では、まちづくりは「政治」や「意識の高い人」だけのものではなく、少し気になった人が一歩踏み出すことから始まるものだと言われた。その象徴的な取り組みが、コロナ禍で成人式が中止になった若者の思いを受けて実施した「市原はたちトロッコ」である。小湊鉄道のトロッコ列車を活用し、地域に若者が関わるきっかけをつくった。

活動の中では、協力者が当日に来られなくなるなど、思い通りに進まないこともあった。それでも、困ったときには話すこと、謝ること、もう一度考えることを大切にしながら、活動を続けてきた。

団体の主な活動には、「市原はたちトロッコ」のほか、高校生の提案から生まれた若者の活動応援拠点「理想の自習室」、鶴舞地区で高齢者で行う里山活動、埼玉県行田市での畑活動などがある。いずれも、最初から大きな成果を目指すのではなく、「やってみたい」という思いを実際に試してみる場となっている。

発表を通して印象的だったのは、まちづくりは特別な会議や大きな計画からではなく、人と出会い、話を聞き、少し手伝ってみることから始まるという点である。若者にとって、完成された場に入ることは難しくても、「少し手伝ってみる」ことなら関わりやすい。だからこそ、最初から完璧でなくても、「のぞいてみる」、「話を聞く」、「少し関わること」が大切な一歩になる。

のろしは、まちづくりを身近なものとして捉え直し、「やってみようかな」という小さな気持ちを次の行動につなげていく若者の活動を応援している。



②南陽青年団（山形県 南陽市）

南陽青年団は若者が地域と関わり、学び合いながらまちづくりに取り組む青年組織である。南陽市制施行 50 周年記念事業「めざせ 100 万円！南陽若者コンペティション」に参加した若者たちがその活動を通して、若者がネットワークを作る大切さに気づき、活動をしながらか若者の掘り起こしやネットワークづくりを進め、その後、2021（令和 3）年 3 月に南陽青年団として活動を開始した。

現在、団員 34 名で活動しており、行政からの支援や青年団 OB・OG などの協力を受けながら事業を行っている。

活動の特徴は、堅苦しさよりも「ゆるく」「楽しく」を大切にし、若者が無理なく関わり続けられる雰囲気をつくっている。

主な活動には、「置賜地区高校生まちづくりワークショップ」と「きくらら祭」がある。高校生まちづくりワークショップでは、地域の人から話を聞いて、地域のつながりやまちづくりについて高校生と一緒に考える。2022（令和 4）年度からは高校生自身も実行委員として企画運営に関わるようになった。参加者の満足度も高く、新たな団員が生まれるきっかけにもなっている。また「きくらら祭」では、親子連れを対象に、飲食店の出店、はたらく車の展示、ご当地ヒーローショーなどを行っている。地域の人と直接ふれあえる場であり、高校生にとっても企画や運営を経験できる貴重な機会となっている。

活動を続ける中では、運営に関わるメンバーの負担の増大や、団員同士がゆっくり話し合う時間の減少といった課題も見えてきた。そのため今後は、イベントを行うだけでなく、食事会や学びの機会を通して、団員同士の関係を深め、居心地のよい組織づくりを進めていきたいと考えているようだ。

南陽青年団は、若者が地域に関わるきっかけをつくり、楽しみながら学び、次の活動へつなげていく団体である。イベントだけでなく、人と人とのつながりを大切にしながら、若者にとって意味のある居場所を目指し活動が続けている。



カンファレンスルームグリーン

- ① Hope Creator（東京都 国分寺市） 峯奏音さん
- ② はまだ協働学舎ファンタス（島根県 浜田市） 大地本由佳さん
- ③ うるま市青年連合会（沖縄県 うるま市） 崎上桂弥さん

① Hope Creator（東京都 国分寺市）

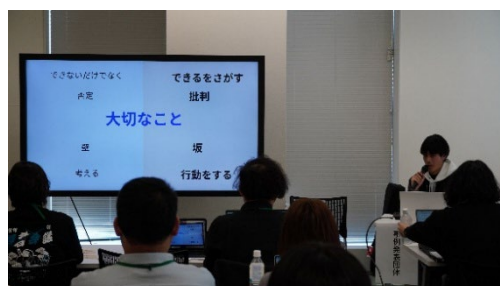
Hope Creator は、学生主体の団体である。2023（令和5）年5月に設立され、全国各地の高校生から大学生まで約30名が所属している。団体の目的は、さまざまな人と交流しながら、メンバー一人ひとりの個性や「やってみたいこと」を活かし、地域社会に貢献することである。

主な活動として、国分寺駅や西国分寺駅周辺での清掃活動、学校の文化祭や地域の祭りへの出店、他団体との共同活動などを行っている。団体の特徴は、自分でプロジェクトを立ち上げられる自由さがある点、メンバー同士で協力しながら、挑戦したいことを実現できる点にある。

発表では、代表的な取り組みとして「ふらっとけやき公園」の活動が紹介された。これは、けやき公園周辺の住民同士が顔の見える関係をつくることを目的にした地域交流イベントである。この活動は、Hope Creator が中心となって実行委員会を立ち上げたもので、学生、社会人、行政関係者などを巻き込み、地域の新たなコミュニティづくりを目指して活動している。

さまざまな活動を行っている Hope Creator だが、若者が主体となって団体を継続的に運営していく難しさも語られた。高校生や大学生が中心の団体であるため、学業や進路、生活環境の変化によって、活動への関わり方が左右され安定して団体運営するための苦労がある。またメンバーのやる気をどう維持するか、活動の役割分担をどうするか、代表だけに負担が集中しないようにする、といったマネジメントも重要な課題だと感じているという。会費を取らない運営のあり方や、プロジェクトごとに関われる仕組みづくり、部署の構築など、団体を無理なく続けるための工夫が必要だと模索している。

Hope Creator は、「高校生だからできない」ではなく、「高校生だからできる」発想や行動力を大切にしながら、地域に新しい交流と挑戦の場を生み出している。



② はまだ協働学舎ファンタス（島根県 浜田市）

浜田市では若者の流出や人口減少、浜田駅周辺のにぎわい低下、大学生と地域との交流機会の減少といった課題があり、その解決に向けて若者と地域をつなぐ仕組みづくりが求められていた。

はまだ協働学舎ファンタスは、大学生を中心とした若者と地域をつなぎ、若者が自分らしく挑戦できる地域をつくるための中間支援組織である。

設立の背景には、2021（令和3）年～2023（令和5）年にかけて行われた「浜田若者会議」の存在が大きい。そこに参加したメンバーたちが、若者会議のときに考えた、「若者が育ち、若い世代が住み続けたいと思える浜田市」を実現しようと、その思いを具体化する一歩として、ファンタスを立ち上げた。

ファンタスの役割は、大きく3つある。1つ目は、学生が地域を知り、地域の人と交流する場をつくる「地域と学生のコーディネート」である。2つ目は、学生の「やりたい」を実現するために、企画づくりや実践を支える「伴走」である。3つ目は、地域の企業や団体の「やってみたい」と学生をつなぐ「地域企業等とのコラボ」である。

具体的な活動としては、浜田市まちなか交流プラザの運営、農村と学生をつなぐ大学生インターン制度、学生主導の島根県専用 SNS 型リクルートプラットフォーム「SHIMANE KAKKI」、などその取り組みは多岐に渡る。これらを通して、学生が地域の人や企業と出会い、学び、実際に動き出す機会をつくっている。

活動が広がる中で、バックヤード業務の整備不足、伴走者やコーディネーターの不足、行政や関係機関との連携の難しさといった課題も見えてきた。今後は、コーディネーターやサポーターの育成、サポーターの強みを生かせる体制づくり、法人化、関係機関との情報共有の強化などが必要だと考えている。

ファンタスは、若者の「やってみたい」と地域の課題や資源を結びつけ、浜田市に新しい交流と挑戦の流れを生み出すため日夜活動を続けている。



③ うるま市青年連合会（沖縄県 うるま市）

うるま市青年連合会は、16歳～30代前半の若者が中心となり、自分たちの手でエイサーやイベントを運営している。活動はエイサーの練習や演舞だけにとどまらず、地域清掃や防犯パトロールなど、地域の安全や生活を支える活動にも広がっている。そのため青年会は、責任感や地域愛を持った次世代のリーダーを育てる場として機能している。

青年会は現在、加入者数の減少や練習環境の維持という課題に直面している。伝統文化を守るだけでは、若者の参加を増やすことは難しくなっており、これからは積極的な情報発信や外部へのプロモーションが必要だと感じている。

その具体的な取り組みとして、うるま市と青年会が連携して行っているのが「うるま市青年会県外派遣プロモーション事業」である。この事業では、青年会が都市部など県外でエイサーを披露し、うるま市の観光資源や伝統文化の魅力を発信している。この派遣事業によって「外に出ることで、自分たちの地元の良さに気づくことができた」という会員の声が紹介された。外部の人たちに演舞を見てもらうことで、会員たちは大きな達成感を得るとともに、自分たちの活動が評価される経験を通して、地元への誇りを再確認している。また、こうした経験は新規加入者の増加や青年会活動の活性化にもつながり、伝統文化を未来へつなぐ好循環を生み出している。

この事例の大きな特徴は、エイサーを守ることで若者が地域に関わり、責任を持ち、仲間とともに地域を支える力を育てることにある。発表の中でも、「伝統を繋ぐことは、人を育てることである」という言葉が示されていた。

うるま市青年連合会の取り組みは、若者が伝統文化を通じて地域とつながり、外部との交流を通して地元の価値に気づき、地域への誇りを高めていく実践と言える。



グループディスカッション②「これからの自分・まちのヒント探し」

ねらい：事例発表の感想を話し、共有してお互いの感じ方の違いを受け止めた。

1日目の「現在位置」や「こうなってほしい・こうなりたい」の理想をもとに、対話を通してこれから「まちづくり」に関わっていく際のヒントを得る。語り合いを通じて得られる多様な価値を作り出すため、共有した課題をともに考え、相手の立場に立ってまちを眺め、相手の活動を考える時間をつくる。

参加者は事例発表を聞き、お互いに感想を述べあいながら、気づいたことや学んだこと、参考にしたいことをまずは語り合った。その後、これからの自分・まちのヒント探しとして、自分や自分のまちのことを話すだけでなく、他地域の事例や意見を聞くことで自身の活動や地域課題の理解が深まった。

グループでは「深く話し合った仲間たちだからこそ、しっかりお互いを思い合える意見交換になった。」などの感想が聞かれた。2日間ともに過ごしたメンバーとの絆が生まれ、より深いところまで話し合える関係性が培われ、より密度の濃い語り合いをすることができた。多様な視点の共有により、目標の明確化や具体的な行動への意欲も生まれた。実行委員会では当初、長時間の語り合いが若者たちにできるかと不安な声もあったが、結果的に活発で有意義な交流の場となり、今後の活動のヒントや勇気を得る貴重な機会となった。



事例発表の感想共有からスタート



どのグループでも深い語り合いが行われた



自分のまちの課題を共有



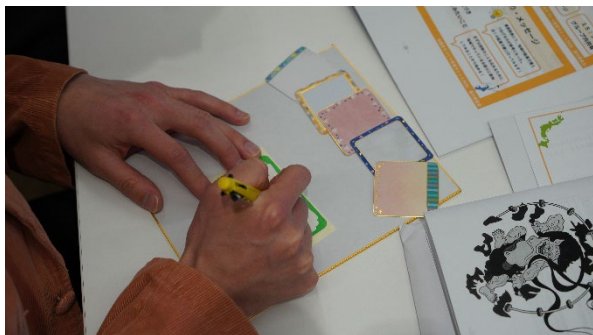
メンバーから助言や応援をもらう

2日間のまとめ

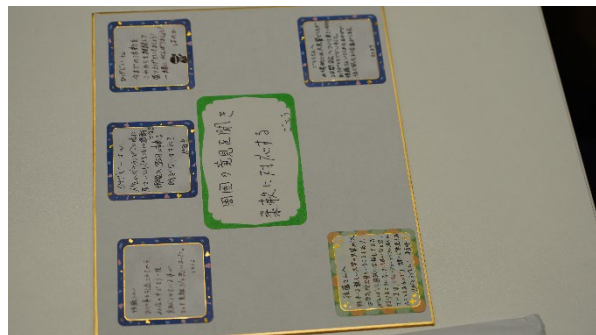
ねらい：2日間の学びや気づきを振り返る。またグループメンバーとのつながりを考える

グループディスカッションでグループの仲間たちと語り合ったあと、2日間の学びを通して、自分や自分のまちでこれからやっていきたいことやサミットでの印象的な気づきなどをメッセージカードに書き、自らの今回の学びを振り返った。またメンバーとのつながりが続くよう、グループメンバーそれぞれに対して応援や励まし、活動へのアドバイスやアイデアなどをメッセージカードに書いた。書いたメッセージカードを相手に渡し、1枚の色紙にまとめ、サミット2日間の学びの成果物となった。

参加者からは「2日間のまとめとして、ただ感想を共有するのではなく、メンバーへの感謝を伝え、他のメンバーと関わったことで得られた知見を振り返る時間になったので、素敵なワークだと感じました。」「ほかの活動団体のリアルな悩みやそこで得られる共感に私のここまでの取り組みでの悩みはみんなが通るものだと再認識し、前向きに取り組めるようになりました。」などまとめのワークに関して肯定的な意見が聞かれた。



2日間の学びを振り返り、メッセージにまとめる



もらったメッセージカードを色紙にまとめていく



世界で1つだけのオリジナルの色紙の完成



色紙を見ながら改めて、2日間の学びを振り返る

全国まちづくり若者サミット 2026 参加者アンケート集計結果

アンケート概要

概要

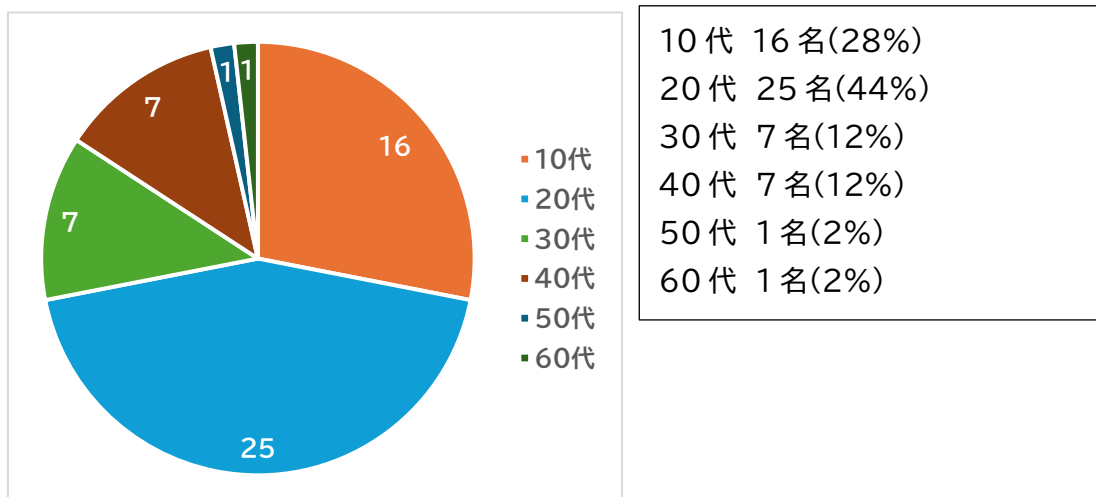
集計日:2026 年 3 月 31 日

集計期間:2026 年 3 月 8 日~3 月 31 日

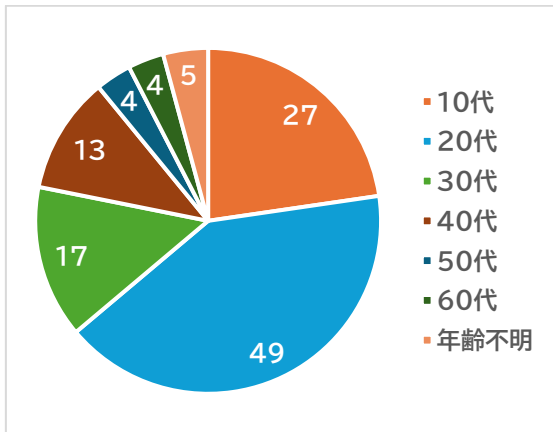
総数:57(参加者数:106 名)

年代

回答者の内訳



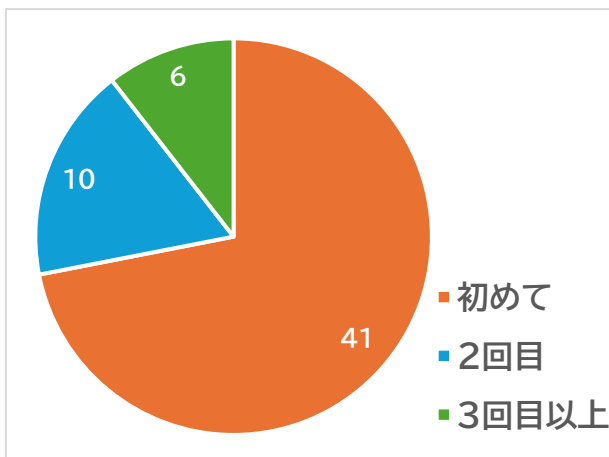
(参考)サミット参加者年代内訳(119 名・職員含む)



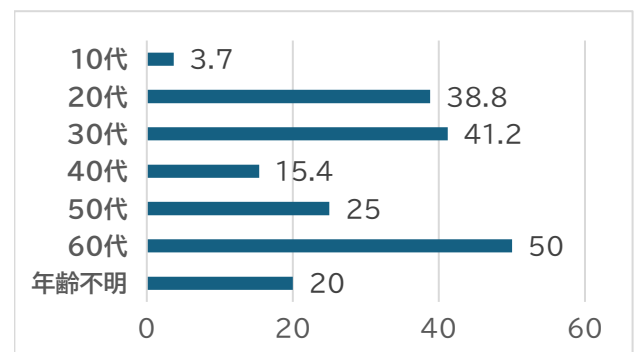
【アンケートについて】

- 10代の回答割合が多め
- 20～60代の回答は参加者の比率とほぼ同じ

この事業に参加するのは何回目ですか？



(参考)年代×参加回数の集計(%)



【本アンケートの特性】

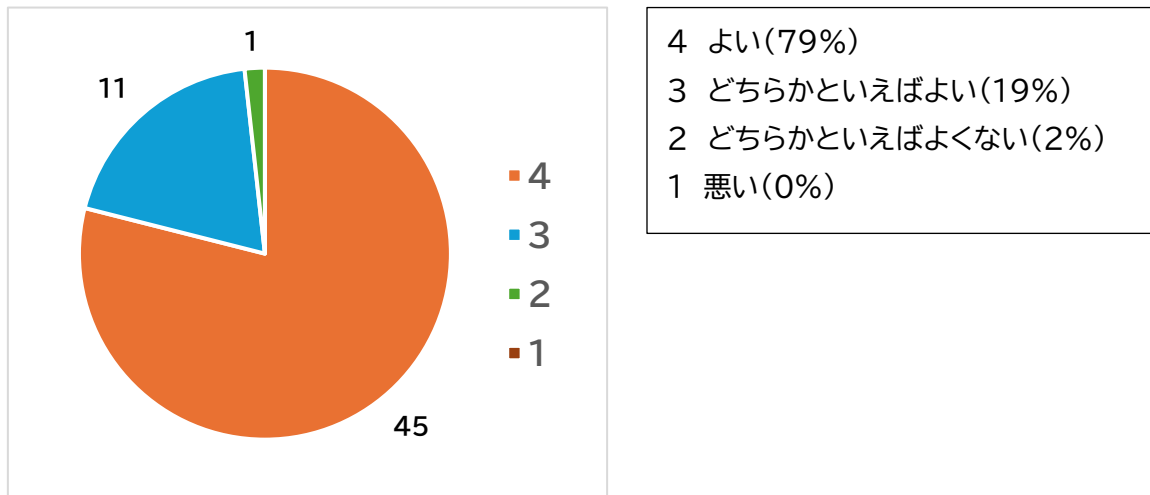
- 10代の回答割合が多め・20～60代の回答は参加者の比率とほぼ同じ
- 初めての参加者の回答が70%を超える
- 20、30代の35%以上が2回目の参加

これらの情報から、このアンケートは以下の特徴を持つアンケートと考えられる。

- 10代の初参加者の意見を比較的汲む
- 初めての参加者の回答率がよい
- 参加者と回答者比率はほぼ同じ(特定の年代意見の偏りはほぼ見られない)

参加満足度

サミットに参加してみていかがでしたか？



なぜそのように感じたのですか？

【自由記述のまとめ詳細】 回答数:52

※生成 AI にて、自由記述欄のデータを読み込ませ、下記条件で指示した結果を反映した。

(条件)

- ①自由回答の特徴を大きく3点に絞り、簡潔な文章にまとめること。その際、可能な限り考察は排除し、具体例を出すなど工夫して元データの情報を生かすこと。
- ②よく見られたキーワードを10個挙げること。
- ③それらの特徴やキーワードをもとに、「イベントの参加全体満足度の評価理由」の観点から200字程度の要約を作成すること。

※自由記述原文は【データ(P23)】を参照

①自由回答の特徴(3点)

1. 交流・つながりの充実

「多くの人と交流できた」「全国の仲間と出会えた」「チームメイトと関係を築けた」など、参加者同士の出会いや関係構築に関する記述が多数見られた。

2. 学び・刺激・気づきの獲得

「新たな発見」「他団体の活動が参考になった」「自分の活動を見つめ直せた」など、知識や視点

の広がり、刺激を得たという具体的な記述が目立つ。

3. 熱量・楽しさ・満足感の高さ(一部改善意見あり)

「とても楽しかった」「熱意に触れた」「刺激的だった」といったポジティブな感想が多い一方で、「交流機会が足りない」「うまく繋がれなかった」といった一部課題も挙げられている。

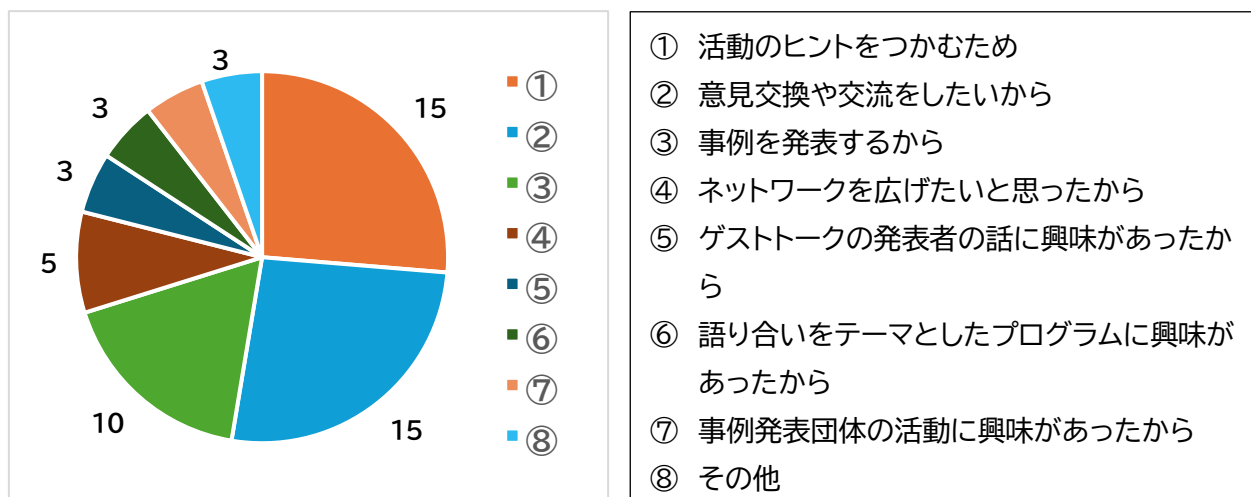
②よく見られたキーワード(10 個)

交流／つながり／学び／刺激／楽しい／仲間／熱意／発見／議論／悩み

③要約(約 200 字)

本イベントは、多くの参加者が「交流」や「つながり」を通じて全国の仲間と出会い、「学び」や「刺激」を得られた点が高く評価されている。特に、他団体の事例共有や議論を通じた「発見」や「悩みの解決」が満足度向上に寄与している。また、「楽しい」「熱意に触れた」といった感情的な充実感も大きい。一方で、一部では交流機会の不足や自身の活動への接続の難しさが指摘されており、今後の改善点として挙げられる。

この事業に参加した一番の目的は何ですか？



「全国まちづくり若者サミット 2026」 報告書

発行 一般財団法人日本青年館

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町 4 - 1

電話 03-6452-9012 F A X 03-6452-9026

URL <https://nippon-seinenkan.or.jp/seinenkan/>

E-mail wakamono@nippon-seinenkan.or.jp
